

最近、十勝農業試験場で行われた試験成績を表に示す。これによれば、10a 当たり30~50kgの肥料窒素の施用で、350~410kgの大豆の収量をあげている。これ以上の多収が、安定的に得られるかどうかについては、さらに今後の検討に期待したい。

表 3 窒素肥料依存型栽培における大豆の収量

(十勝農業試験場)

処 理	収 量 (kg/10a)		
	総 量	茎 莢 重	子 実 重
慣 行 (標 植)	573	257	316
標植+P資+硫安-N30kg	755	382	373
" " " 40	797	383	414
" " " 50	753	368	385
" " CDU-N30	701	355	346
" " " 40	780	374	406
" " " 50	800	388	412
密植+培土+P資+N追10	735	334	401

慣行：無施肥、60cm×25cm 施肥法：全層施肥、品種：キタムスメ

5. 小ま と め

① 大豆の多収を考える場合には、その収量目標に応じた養分の、円滑な供給が必要である。とくに大豆は、他の作物や他の要素に比較して、窒素の吸収量が多いので、窒素栄養が多収の決め手となる。

② 比較的多収(390~460kg)をあげた大豆の、窒素吸収量に占める根粒固定窒素の割合は60~72%で、これは従来いわれてきた33~67%の上限に当たる。しかし、根粒固定窒素量は22~33kgで、従来値10~15kgより多く、しかも収量が高まるほど、増大する傾向があり、大豆の多収における、根粒菌の果たす役割は大きい。

③ 最近、根粒窒素依存型による大豆栽培のほか、根粒の窒素固定能を無視した、肥料窒素依存型の栽培も試みられ、350~410kgの収量が得られている。

次回には、大豆の生育時期別に分けて窒素栄養を考えてみる。

54年産米の作柄は「やや良」の見込み

去る10月30日の閣議に報告された54年産陸稲の予想収穫量(10月15日現在)は、水稻の作況指数(平年作=100)は全国平均で103の「やや良」と前回報告(9月15日現在)と同じであり、また10a 当たり収量も前回(481kg)とほぼ同水準の482kgで、53年産米に次ぐ史上2番目の豊作であることに変化はなく、予想収穫量は水稻11,904,000トン、陸稲62,000トンの見通しとなった。

これは53年の収穫量(水陸稲合計12,509,000トン)に比べると、減反強化の影響を中心に623,000トンの減少となるが、今年度の予想消費量1,130万トン弱よりは70万トン近くも多く、政府が目指した米の単年度の需給均衡は、前年度に引続き崩れることが確実となった。

全国の水陸稲は10月15日現在で76%が刈り取りを終っており、今回の報告は、54年産米の収穫量の予想としては最終のものである。

農林水産省はこのあと12月下旬に確定収穫量の発表を予定している。今回報告によると、水稻は9月下旬の長雨と16号台風により、東海、近畿、四国など関東

以西の太平洋側を中心に倒伏、穂発芽などの被害が発生したが、他の地域では天候がおおむね順調だったため、全国の作柄は前年と同じ「やや良」で推移した。農林水産省では10月15日以降も20号台風の影響は少なく、収穫量は大きな変化はないとみている。

農林水産省は53年度から米の単年度需給均衡を目指して減反強化(水田利用再編対策)を進める一方、今年度から備蓄用約200万トンを除いた古米在庫480万トンを対象に、過剰米処理対策に乗り出した。しかし、昨年度は米作が史上最高の豊作であったことや、消費の見通しを誤まったことから、古米在庫は計画通りには減少せず、10月末の過剰米は、備蓄用を含めて650万トンにのぼる見通しとなっている。

このため、このうえ本年産米が70万トン近く余ることになれば、単純計算では来年秋の古米在庫は720万トン弱と、過去最高の48年の水準に達することになる。また来年度に予定されている100万トンの過剰米処理が順調に実現した場合でも、その大半は本年産米の余剰分で「帳消し」になることになり、過剰米の“重荷”は当面、減らない見通しである。